



つのぶえだより

474号 2020・12・1

角笛幼稚園

年主題

こころが満たされる

12月の聖句

今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主が
お生まれになった。この方こそ主メシアである。

ルカによる福音書 2章 11節

いつしかこの年も、最後の月を迎えることとなりました。新型コロナウイルスの感染が三度拡大する中で、クリスマスがやってきます。例年であれば、角笛幼稚園のクリスマス礼拝では、年長組のお子さんたちがクリスマス・ペイジェント（キリスト降誕劇）を演じることとなりますが、新型コロナウイルスの感染リスクがあることを考慮し、例年とは違う形でクリスマス礼拝を捧げることとなります。保護者のみなさまには、ご理解をいただければと願っております。

幼稚園では一足早く11月の中旬から、クリスマスに向けて、毎週1本ずつろうそくに光を灯しながら、アドベント礼拝を捧げています。私は、年長組のお子さんたちと共に礼拝を捧げているのですが、今年最初のアドベント礼拝において、私がクリスマスについて話をしている途中、一人のお子さんから『救い主』って何？』という私への問いかけがありました。私は、幼稚園の礼拝で聖書の話をする時に、その途中で、お子さんの口から何らかの問いが発せられる場合には、できれば短く応答した上で話を続けたいと思っています。しかし、今回、『救い主』って何？』という問いが投げかけられ、これは幼児にも分かるような言葉での即答は難しい問いだと咄嗟に判断して、何も答えないまま話を続けることとなりました。「あとでお話するね」と言ってあげればよかったなど後から思い返したのですが、『救い主』ってこういうことだよ』と幼児にも分かる簡潔で当意即妙な答えとはどういうものだろうと改めて思わされています。

「救い主」とはどういうことか。角笛幼稚園でも、毎年のクリスマスでそのお誕生をお祝いするイエスさまが私たちの救い主であられるとはどういうことか。この問いは、実に大きな問いで、聖書という分厚い書物が、その全体をもって語ろうとしていることに関わる問いだと言えます。誰か大人である人に話すところでも、何度でも時間をかけて話すことを必要とするような問いです。

神の独り子イエスさまが私たちの救い主としてお生まれになった。私たちが生きるこの世界全体の創造にも関わられた、大きな大きな存在であられる神の御子が、小さな小さな一人の人間、しかも私たちと同じように母親のお腹から一人の赤ちゃんとなってこの世に来られた。それが救い主であられるというクリスマスの出来事は、私たちには実に不思議な出来事です。私たちの救い主イエス・キリストは、マリアとヨセフの腕に抱かれる、小さな体を持つ赤ん坊となって生まれてくださった。肉体を持ち、触れ合うことができる救い主となってくださいました。

今年、新型コロナウイルスの感染拡大という、思いもよらない状況の中で、それまでの人間関係が大きく変わったと感じている人は少なくないようです。今回のウイルスが、「密」にならないように人と人との間に「ディスタンス」、つまり物理的な距離、またそれに伴う精神的な距離を生じさせている一方で、夫婦や家族といった人間関係には、親密さ、「近づくこと」をもたらしているという側面もあることを知ります。一緒にいる時間が増えて、ストレスがたまるという場合も多いのかもしれませんが、しかし、ある危機的な状況の中で、その時を一緒に乗り越えようと、協力して家事を行ったり、子育てについて、将来について、さまざまなことを語り合う時間が増えたことなどによるのであろうかと思えます。

人は「肉体」をもって生まれてきます。親と子どもとのスキンシップ—今は家庭内感染も大きな問題となっていてそこでも気をつけながらであるかもしれませんが—それが大切なことは言うまでもないでしょう。さまざまなものが「リモート」によって行われるようになったとしても、私たち人間が、体を持って触れ合い、時間と空間を共有しながら親密さや信頼を育んでいく存在であることは、変わることがない真実として、失われてはならないことでしょう。

「救い主」として、神の御子が私たちと同じ人間となってお生まれくださった。小さな体を持った赤ちゃんとして誕生された。マリアとヨセフに抱かれ、触れ合いつつ、私たちの救い主である御方も成長して行かれた。その不思議さを改めて思い、『救い主』って何？』というお子さんの問いに、どう答えることができるのか、考え続けています。

園長 七條真明